

2010年に慶尚大学との交流プログラムで九州大学病院の5年生臨床実習に参加したある韓国学生の感想文です。この感想文はこの学生が慶尚大学のホームページ用に書き、実際、慶尚大学のホームページに掲載されたもので、慶尚大学の先生が送ってくれました。九州大学向けに書いたものと違い、韓国の学生が自分の大学内向けに書いたものですから率直な感想が読み取れ、興味深いと思い先方の了解を得て翻訳しました。医学部同窓会の支援を得て行っている韓国の大学との交流プログラムが、韓国の学生の目を通して日本の医療と九州大学のイメージ向上に大いに役立っている側面もあることが分かりうれしく思いました。一部に学生本人の誤解があるところもある上、私の日本語訳が稚拙で読みづらいたところもあるかと思いますが、一読していただけたら幸いです。(教務委員会韓国交流担当 康 東天)

日本九州大学交換学生プログラムに参加して  
4年生 シン チギョン

出発何日前より始まった心配と期待。「一ヶ月も滞在しないといけないのに果たして友達にはできるだろうか？日本語は一言も喋れないのに大丈夫だろうか？英語も自信がないのに、、、」。数え切れないほどの心配をしながらも、一方で新しく経験するであろう多くのことに期待を膨らませ日本へ向かう船に乗りました。博多港に到着すると、今回の交換プログラムを手伝ってくださった九州大学の臨床検査医学の康東天教授と学生係の渡辺さんが迎えに来て下さっており、日本の土地を踏んだばかりでとても緊張していた私たちはリラックスできました。簡単な挨拶と紹介を終えたあと、私たちは宿舎へと向かいました。

寄宿舎は博多港からいくらも離れていない所がありました。女子は、男子学生用寄宿舎から1ブロック離れたところにある女子学生用寄宿舎に泊まる事になりました。寄宿舎の利用説明を一通り聞いたあと、私たちはひとりに一部屋づつ割り当てられました。2人で一部屋だとばかり思っていたので大変ありがたく思いました。大部分の宿泊費は九州大学が負担してくれており、私たちは一ヶ月分として1万5千円を払うだけでした。部屋には電気ストーブ、冷蔵庫、洗濯機、バストイレ等が完備していて、たいいていの生活に必要なものは備え付けてありました。簡単に荷物を整理して早めに就寝しましたが、明日から始まる病院実習に対する考えで緊張していたせいか、なかなか寝付けませんでした。

実習初日は、病院へ行く道を知らない私たちのために、渡辺さんが迎えに来て病院まで連れて行って下さいました。まず事務室で臨時のIDカードを作り、実習書も受け取り、簡単な説明を受けたあと、一緒に実習するグループの学生たちを紹介されました。私は一ヶ月間I2グループに所属し、放射線科、呼吸器科、麻酔科、小児外科の4科を回ることにな

りました。I2 グループは4名で、女子学生が一名いました。日本語で出来るのは簡単な自己紹介だけである私は、非常に緊張したまま I2 グループの学生と対面しました。3 人の男子学生がぎこちなく簡単な自己紹介を終えて、「やはり予想通り日本人は英語が得意でないなあ。これから意思疎通は身振り手振りですることになるのか?」と心配していた私に、ただ一人いる女子学生の口から出てくる流暢な英語！わあ一助かった！“あやね”は3年間イギリスで暮らしていたとかで英語が堪能だということでした。意思疎通が円滑に行きそうだという安堵感を感じつつ日本での病院実習が始まりました。

最初の科は放射線科でした。最初にまず驚いたのは九州大学の放射線科のものすごい規模でした。私達の病院の2倍はある規模で、最近建てられた病院の一階の大部分を占めていました。10台を超えるCTとPETCT、2台のサイバーナイフ等多くの最新の装備に加え、放射線治療を受ける患者用の放射線科病棟も別にありました。さらに驚いたことは、放射線科には教授が1人しかおらず、ここに所属する医師だけで30-40名になるということでした。あとでグループの学生に聞くと、元来日本では1つの科には一名の教授しかおらず、あとの医師はただ先生と呼ぶのだということでした。しかしながら、東京方面ではこのような制度はすでに有名無実化していて、現在では九州などいくつかの地方でのみ残っている制度とのことでした。また、先生が学生たちに大変親切だという点も不思議な気分させられた一つでした。学生実習に来ることを面倒がらず細かな点にまで一つ一つ説明してあげている点も印象的でした。そして日本語が全く出来ない私のために細やかに英語で説明してくださり、本当に感謝の気持ちでいっぱいになりました。このように午前午後は実習で回り、夜は日本人学生と集まって一緒に夕食を取るようなことをしている内に一週間はあっという間に過ぎました。

2週目は呼吸器科、3週目は麻酔科で実習をしました。呼吸器科では講義よりも学生1人に患者を一人ずつ割り当て、患者を診ることが中心の実習でした。一日の実習時間の内3分の2が患者を診るのに割かれていました。慶尚大学病院では実習時間中に患者を診なさいという時間が別にないため、この点も羨ましく思いました。患者を診て、残った時間は各自勉強をしたり、自分のしたいことをしたりという風に過ごすようでした。呼吸器科では患者を診なさいという時間が多いのとは反対に、麻酔科では一日中休む間もなく講義が続きました。それに、麻酔科の先生たちは講義を全て日本語でされたので、私には本当に疲れる時間でした。しかしながら、日本人学生と一部の先生が気を使ってくださり、何とか実習をこなすことが出来ました。特に呼吸器科の中西先生は私たち留学生に気を使ってくださり、男子学生のヒョンジンと私を夕食に招待してくださり、これは日本の文化を知る大変良い機会になりました。

最後の週は小児外科でした。小児外科は私達の病院にない科でしたから、期待を膨らませ

ながら実習へ入りました。初日は大回診があり多くの患者を診て説明を聞くことが出来て、本当に期待以上に良い時間でした。この間、教科書だけでしか見ることができなかった先天性疾患を実際に見ることができて、近くで手術を観察する機会もありました。さらに、学生 1 人に患者一人を割り当て、最終日の回診時には学生発表をするようになっていました。チャートが全て日本語でしたので苦労しましたが、同じグループの学生が英語で一つ一つ解説してくれたおかげで患者の把握も発表も無事に終わることが出来ました。これまで全く経験することが出来なかった小児外科実習は私にとって強い印象と興味を引き起こしました。

この一ヶ月間の九州大学訪問では多くのことを感じそして経験することが出来て、本当に貴重な時間でした。最初は私たちと大して変わることもないであろうと考えていた日本。しかしながら、日本は医学的側面も人間に対する接し方も私が考えていたのとは違っていました。真っ先に目に付いたことは患者に対する配慮でした。サービス精神が透徹しているというか、患者に対してとても親切でプライバシー保護が良くなされていました。日本は空間がとても狭く、多用途に活用しているのだと聞いていましたが、病院だけは違っていました。CT室、内視鏡室、手術室等患者を収容する空間は非常に広く作られており、放射線治療を受ける患者のための鉛で作った個人休息空間も快適に過ごせるよう作ってありました。また、病室も 4 人室以上の部屋はありませんでした。

また患者に対する麻酔同意を得るために担当医師が 30 分以上説明している様子も、私には見慣れない風景でした。手術室に入れば服を全部脱がされて手術台の上でがたがた震えている患者ばかりを見て来た私には、患者のために手術室の温度が下がらないように気も遣い、清潔な手術室を維持するなど患者への配慮を十分しているのに加え、必要な部位以外は露出しないようにしている様子も驚きました。このような配慮を知っているからなのか、患者たちもまた医師を全的に信頼して従っています。だからなのか、日本は医療訴訟が至極少ないそうです。もちろん他人に対して親切であることが日本人の特性であることもあるけれど、わが国の場合、ともすれば病院内でやかましく繰り返られる患者と医師のいさかいを見るにつけ、このような患者に配慮するシステムや行動などは我々が学ばなくてはいけない側面ではないかと思えます。

縁もなかった日本で友人が出来たことも、また今回の交換学生プログラムの大きな成果であることを省くわけには行きません。一月の間、同じグループの日本の友人と過ごすことができたおかげで、普通では得られない長い期間身近に日本の文化を知る機会を持つことが出来ました。日本人は表面では非常に親切だが個人主義が強いとばかり単純に考えていたのですが、実際に生活してみて感じたことは、個人主義的性向が確かにわが国より強いけれど、やはり人への気配りも多く、また情も深いことを感じる事が出来ました。将来

は同じ職種に従事することになる他の文化圏の人たちと出会い、縁（えにし）を結ぶ良い機会になったようです。多様な文化の体験と以前には経験することが出来なかった実習を通して、新しい科に対する関心も生じたこともこの実習の成果のようです。

このように多くのことを学ぶことが出来た一ヶ月間の九州大学との交換学生プログラムを支援して下さった慶尚大学と多くの配慮をして下さった九州大学に本当に感謝しています。慶尚大学は交換学生プログラムを始めたばかりでまだ多くの大学との連携はないけれど、今後はもう少し多くの海外医科大学と交換学生プログラムを実施し、もっと多くの学生に多様な経験の機会が与えられるようになったらという願いを持ちました。



I 2 グループの仲間と一緒に



大宰府神社にて